

## 2024年4月28日オープントミーティング報告

- 2024.4.28日(日) 15:00-16:30
- 発表者：谷垣雄一 四條畷学園小学校教員
- テーマ：初めて『てつがく対話』に取り組んだ1年間の軌跡
- zoom
- 参加者 一般参加当初 11名 運営委員4名 合計 15名

●内容：5年生の担任として、年間を通してサークル対話・てつがく対話を行いました。教員も子どもも初めての取り組みで手探り状態でしたが、1年間やり続けた記録をお伝えしたいと思います。今年度更に対話を深めていくためのヒントを、先生方とのミーティングを通して見つけたいと考えています。

### 発表要旨

- ・学校紹介
- ・P4Cの取り組みは初めて。
- ・P4Cを取り入れたきっかけ。色々な取り組みで、選択を大切にしている。選択のためには、自分でしっかりと考えられる子であることが必要。そのために必要な力をP4Cで養うことが出来るのではないかと考えている。
- ・「哲学対話」と「サークル対話」とを区別して実施。
  - サークル対話ではテーマは自由
  - 哲学対話は道徳的内容を含む
- ・2023年度の実践
  - 哲学対話
    - 全行体制ではなく研究部会の一つとして実施。主に、2, 3, 5, 6年生を対象。
    - 主に道徳の時間で実施
  - サークル対話
    - 主に特活・総合の時間で実施。5年生の1クラス
    - 週3回(1回15分)、およそ100回実施
  - 対話に向けて
    - セーフティの確認
    - 指名の仕方を決める コミュニティボールを使用
    - 問いを決める 日々の生活の中から、あるいは道徳の教科書から
  - 授業の流れ

1. WS に、はじめの考えを書く。
2. 近くの人意見交換
3. サークルの形で対話
4. WS に対話後の考えを書きふりかえる。

使用したワークシートの紹介

1. 問いに対する、最初の自分の考え
2. 対話後の自分の考え
3. 対話に対する振り返り・感想

5 年生 31 人で対話した 1 年間の問い (全 23 回)

問いの例。「このクラスをどんなクラスにしたい?」「好きって何?」「親友とはどういうもの?」「なぜお母さんは、人の前では声が変わるの?」「自分にとって大切な存在は何?」「どうして学校に行かないといけないのか?」「神様っているの?」「なぜお金があるのだろうか?」「一番便利なものは何?」「死んだらどうなるの?」「男らしさ女らしさって何?」「人間は何のために生まれてきたのか?」「なぜ戦争は怒るのか?」

入ってくると予想される内容項目

・善悪の判断、自由と責任／・個性の尊重／・生命の尊さ

「人間は何のために生まれてきたのか?」の問いの板書の紹介

人間は神様の失敗作?それとも最高傑作?

人間は戦争を起こし、自然破壊をする



次の問い「なぜ戦争は起こるのか?」に続く

「なぜ戦争は起こるのか?」の問いの板書の紹介

問いに対する、最初の自分の考えを円グラフで紹介

問いに対する、対話後の自分の考えを円グラフで紹介／対話前にはなかった考え(指導者のやり方に問題があるから)がパーセントでは一番大きくなっている。対話前に大きかった考えは対話後には小さくなっている。

対話前と後では、新たな自分の考えが出てきたり、議論を通して意見の変容が見えてきた。

この対話に対する振り返り・感想の紹介

問いの紹介の続き

「やり返すことはありかなしか?」「ふつうって何?」「自分の学校の制服についてどう思う?」「なぜ加瀬さんは折り紙を選んだのだろうか?」「なぜ人はこわいと感じるのか?」「なぜ頭が良くないといけないのか?」

制服についての対話の紹介

問いの紹介の続き

「似ていない人と仲良くできる?」「なぜ第二言語を学ぶのか?」(英語専科の先

生からの要望)「どうして楽しいと感じるのか?」「この1年間の対話に意味はあったのか?」

子どもたちのポートフォリオ

ロイロノートを利用している

子どもの意見の紹介

哲学対話を通して、聴くことによって他者理解が進んだ

発言がないときも思考はぐるぐる回り、自己内対話をしている

深まっているって本当? 深まるってどういうこと?

「哲学対話でよく問いが変わったりするから、ふかまったかなって思います。」

「考え方の切り口を友達が開いてくれ、共感したり納得したりして、そこから別の問いへと問いを深めることで、色々な人の意見を聞いてよかった。」

「考えたこともないことを自分いがいの人と、べんきょうできるから。」

「一人で考えられないこともみんなで考えられるから。みんなのいけんとあわせて、分かりやすく、説明できるから。」

⇒深まるとは、多様な考えを知ること→その広がりを集約すること→そこから共通の理解を得ること→自分なりに消化して出力できること→終わりはなく、新たな問いが生まれてくること

ねらったものではない力も伸びていた

「話す力や、手をあげる力が身についた」

「大勢の前で話すのが得意になった」

「〇さんははじめはまったくしゃべらなかつたと思ったけど、さいきんは(じゅぎょうでも)よくっていうか、ちょっとしゃべってきたと思う」

「この対話で少し挙げられるようになった」「少し自信がついた」

⇒話す力と 話せる勇気が生まれている

保護者の目線で(子どもたちの自己評価を見た上で)

「自分の意見も大きな声で言えるようになった」

「うまく言葉で伝えることが苦手だったが、反論したりと…成長を感じる」

「素直に人の話が聞けて、自分でも考えることができる」

「とても恥ずかしがり屋だったが、意見を言えるようになった」

「(寡黙ではあったが) 何度も手を挙げているところが見られた」

子どもたちの率直な思い

「この一年間やってて楽しかった」

「なにより楽しいし、みんなのかかわりがふかまった」  
「成長できるきっかけになると思う」

サークル・てつがく対話の効果のまとめ

- ・話を聴ける子どもたちに
- ・聴いてもらえるから話したくなる
- ・正解がないからじっくり考える
- ・自分と違う考えを聴いて広がる深まる

これからの課題について

問いを作ることにに関して

- ・素材の精選、吟味
- ・道徳教科書、絵本、Q、日常から

問いを深めることにに関して

- ・ファシリテーターの役割について
- ・子どもたちが「問い合う」ことについて

実践を広げていくことにに関して

- ・「考え議論する道徳」との親和性
- ・私学としての独自のカリキュラム。小学校教育への運用

2024年度は、全18クラス、サークル対話を週2回、朝の読書タイムに実施

これまでの「問い」をデータ化して共有。これを学年ごとに蓄積

サークル対話の積み重ねで、楽しむ力、他者を大切にする力を高めて



道徳的内容項目が含まれているてつがく対話へ

放課後に「大人のとつがくカフェ」

## Q&A&C

Q：戦争はなぜ起こるかという対話で、始めの会話から次の時に、指導者が悪いという話になっていき、さらにその話から、皆の話し合いでという展開で、道徳といいながら、社会的な、大事な見方考え方に発展しているなーと感じましたが、中身の質が変わってきているように感じる。このような展開は何がきっかけだったのか。道徳だけでなく、社会科でもやったらいいなと思った次第なので。

A：ロシアのプーチンをイメージして「偉い人が、一人で思い通りにしようとする」とい

うことに対して、ロシアの中でも反対している人がいるという意見も出てきている。一人の指導者によって国が動いているきらいがあるけど、それはだめだとね、皆と相談しないといけない、選挙しないといけない、選挙するには、お互いの意見をちゃんと聞いた上で考えないといけないといったところが、転換だったのかなー、という風には思います。後は、自分事として、今自分が戦争に巻き込まれたらどうするという話に移っていき、男しか戦争には行かないけど、男だけが戦争に行くのはおかしいといったジェンダーの話に移って行ったり、自分の大事な人を守るためだったら、戦争で人を殺すのも仕方ないんじゃないか、という考えも出てきたりして、最後は収束が付かなかった。社会的な内容でもあるなーという考えは理解できます。

C：社会科でも、このような対話をした後、授業をすれば、次元が広がるだろうなと感じた。子どもの感想の中に、友だちが考え方の切り口を開いてくれるというのがあり、素敵だなーと思いました。

Q：小学校養護教諭の立場として、哲学対話は年間何時間あれば、成果が出るのと同僚から聞かれてはみたものの、まだ実施したことがないので、何時間確保してもらえばいいのか、分からなくて、また、例えば、人権教育などにも哲学対話は有効だと思っているが、やったこともない子どもたちにどうやっていいのか、少し助言をいただけたらと思います。

A：1時間では100%無理ですね。まずは、クラスのセーフティがないと対話にもならないのではないかなと思う。例えば、低学年でする場合、聴き合うという力が育っていない間は、成り立たないんじゃないかなと思う。今現在の学校で、全学年でしてもらおうと思っているのは、セーフティを確保して、聴いてもらえる安心感があるから話せるという土壌を創るところから取り組もうと思っている。例えば、高学年では、朝の15分の時間でしたが、子どもたちから、生まれ変わったら男がいいか女がいいかという問いが出てきていた。2～3時間で対話するという感覚はつかめて、意見も出てくるとは思うが、出た意見からお互いが深められるには、継続的な取り組みが必要なのではないかなと思う。

C：サークルタイムを続けるということが聴き合う関係を創っていく。

Q：対話のためのスキルのものは、サークルタイムでは求めなかったのですか。

A：先ほど、シンキング・ツールの話をしましたが、それを掲示したりすると、子どもはそればかりに気を取られるので、教師が体現するイメージでやっていました。教師が、シンキング・ツールを示すことで、こういう風になると話が進んだり、盛り上がったりするんじゃないかというのを、1学期くらい、教師がやることで、学年の後期では、子どもが理解して対話をしていくようになっている。

C：継続してこのようなことをするのが、哲学対話を支える大きな土台になっているのかなと思う。

Q：何時間したら成果が出るという質問についてはどう思いますか。

A：どう応えていいか難しいですね。何を成果とするかということも聴いてみたいですね。

C：担任とは違って、時数を貰う立場なので、成果を出すのに協力はしたいけど、現実的にどこまで割けばいいのかというのが、担任の先生の立場なのかなとは思う。3 時間でいいのとか言われるけど、それは…。朝活の時間に使えるような時間があるので、調整をしてはみたい。

Q：哲学対話のやり方が分からないので、お聞きしたいのは、生徒からどのようにしてテーマを引き出しているのですか。

A：毎日、手紙係のようなことを当番の中に入れて込んでいます。一つの班が 4 人くらいで、その班は 1 日通して、活動を共にしている中で、特にお昼ご飯の時などに、それぞれの係りの話をさせている。お昼ご飯に問いのことを考えてとかいうように。他の時間のある時に、明日の問いは何にすると聞いている。教室のなかに、問いの箱みたいな投書箱を設置している。箱の横には紙を置いておいて、子どもが問いを思いついたときに、投函できるようにしている。また、テキストから課題を見つけたり、AC の CM を使ったりするのも面白いのではないですか。問いは日常に転がっているもので、それに気付けるように声掛けをしていくというようなことをしています。

C：ワークシートに「皆で話し合いたい問いはない」といった欄を作る。

Q：私の勤務校（私立の小学校）でもようやく哲学対話が始まりました。道徳の時間を哲学対話を中心にしてどういう風にも実施していこうか話し合っている最中です。一応、各週に 2 時間連続して実施しようとなっていて。「何時間くらいやったらいいですか」「どんなテーマだったら対話が上手くいくんですか」というようなことを同僚から聞かれます。本当はそれを皆で考えていきたいのになーと思っている。1 年間実施して、子どもの変化もそうなのですが、教員の変化があったりとかはしていないのか、それをお聞きしたい。

A：どんな子ども像を持っているかによって、うまくいったかどうかが変わってくるのではないですか。学校の目指す子ども像がはっきりしていないと何をもってうまくいったかは決められないと思います。【目指す子ども像こそ、皆で話し合ってみつけて行こうと考えている】

Q：ロイロノートを使っているというお話でしたが、思考支援ツール・アプリを哲学対話の間に挟んでいくなかで、子どもの考え方の変容があるのではないかと考えていますが、このことについて、先生は肯定的に捉えていますか、それとも否定的に捉えていますか。

A：子どもたちの紙ベースでのやり取りを毎回子どもに返していますが、最後の哲学対話「哲学対話に意味があったのか」という問いを考える時に、ロイロノートで 1 年間作って貯めた問いのワークシートを全部見直してもらった。見直してみて、自分の 4 月くらいの問いの仕方と、哲学対話に対する姿勢に変化が見れるかを検討しました。ロイロノートで撮ったものを見るというのは、肯定的に捉えています。

Q：哲学対話を取り入れた授業でも、見学させていただいた時に、あるクラスはセーフティが行き届いていて、別なクラスは子ども自身が問いを発して議論しているということが印象的でした。それぞれのクラスがどうしてそうなっているのか、教えていただけたらと

思います。

A1：哲学対話で子どもたちが身につけている力は、全教科に戻っていっていると感じる。哲学対話で身につけた子どもたちの聴き合う力、話す力、クリエイティブな力は、国語の力とはやはり違うのではないか。

A2：哲学対話ということあまり意識しなくなった。子どもの中から問いが出てくるような授業をしたいということが根本にあるので、実際に子どもの中からそのようなことが出てくれば、その子を評価する動きが出てくる。「何か皆で話し合いたいことある？」ということをお喋りのように続けていくと、子どもたちの中から自然に問いが出てくる。

Q：教師が発問して、それに子どもが答えるというのは普通のことであるが、子どもの発言に対して子ども自身が問いを出していくというのは結構難しい。だから、結局教師が口をはさむことになってしまう。

A2：沈黙を恐れないということかな。待つということ。授業が上手く展開しないこともあるが、継続して実施していくことが大切。ワークシートの持つ役割も大切。対話の流れを振り返り、それを確認し、評価してあげる。

Q：セーフティがあるというのを、どういう状態と考えたらいいのか。

A：サークルタイムのある日は子どもたちが机をどけて、椅子で円を作っている。この時、机を挟まない距離感、肌が触れ合うくらいの距離感、これを毎日積み重ねていくと、自然とお互いの気持ちの解放につながっている。物理的に近いということが大切。安心して話していけるということ。4-5人の小さいサークルを作っていくということに対しても効果があると思っている。

Q：1年間続けてきて、何かつらい時期とはなかったですか。

A：哲学対話が学級経営に一番効果があった。いい面でしかなくて、セーフティを確保して見つめ合える環境が生まれ、いい効果しかなかった。ただ、支援が必要な子がいる場合、対話が回らなくなるということはある。そういう意味でしんどさはある。ただ、そういう場合でも、他の子が支援を必要とする子を受け入れられるのか、という期待はある。

C：全校で実施する場合、色々な事態をそうていしなければいけないし、実際色々な事が起こるので、エネルギーを使う。さまざまな、うまくいかなかった事例を集めて、ストックしておけば、いろいろ役に立つ思う。

C：子どもたちの問いを集めていけば、色々な形で利用できるようになるのではないかと考えています。発達段階に応じた問いはあるのか、子ども特有な問いはあるのかなど、面白い発見が出来るのではないかと考えます。